

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 8 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531123

研究課題名(和文)国語科と英語科の連携による教員と学習者のための教科内容高度化プログラム開発

研究課題名(英文)Advanced Curriculum Program Development through collaboration with Japanese and English

研究代表者

菅井 三実(SUGAI, KAZUMI)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・准教授

研究者番号：10252206

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、「ことば」の学習としての共通基盤をもつ国語科と英語科の文法教育を連携させるための具体的方策を考察するものである。初期の段階で、研究全体の内容的な基礎資料となる単行本を刊行し、内容の準備に関して十全の状態を整えることができた。最終年度には、言語教育に関する単行本の原稿を仕上げるとともに、小学校との接続を視野に入れ、小学校における国語(日本語理解)と英語(外国語活動)との間で相互に有益な事象を取り上げて具体的な事例に基づく指導事例案を作成した。

研究成果の概要(英文):The present research is devoted to correlating the subjects, Japanese and English, at the level of junior and senior high school. Some grammatical phenomena are hardly noticed even if they are common to Japanese and English. To the extent that English irregular verbs are frequently used, Japanese verbs *iu* (say), *iku* (go) and others should be called "irregular verbs" in that they are not only frequently used, but also have irregular forms in the honorifics, not in the conjugation. The findings in this research have been published into two books.

研究分野：理論言語学 言語教育

キーワード：国語教育 英語教育 言語研究 対照研究

1. 研究開始当初の背景

本研究課題をスタートさせるにあたって、研究代表者が抱いていた認識は、国語と英語の風通しを良くする必要があるというものであった。中学校および高校学校での英語科と国語科は、ともに「ことば」を素材とする点で本質的に共通する部分をもつものでありながら、教科の体系の中では完全に異なる教科として設定されているため、積極的に連携した形で学習機会を設けることはなかった。そもそも、英語科における学校英文法は英国の伝統文法を受け継いでいるのに対し、国語科における国文法は日本の伝統的な国語学の中で構築された橋本文法をベースにするものであり、英文法と国文法の統合的な連携の試みは、そのままでは技術的にも困難と言わざるを得ない状況にある。このことが、国語科と英語科の文法教育において同じ用語で違う概念を表すなどの混乱を招いたり、日本語と英語の共通点に気付く機会を失う原因になっていた。もちろん、基礎研究のレベルでは英語と日本語を積極的に相対化させる研究は対照言語学という領域の中で多くの蓄積がある。しかし、学校現場で活用可能なものとなると、ほとんど見られない。

本研究は、いわば英語科と国語科に対照言語学的な研究を導入し、学校教育のレベルで両教科にとって相互に有益となる知見を生徒に提供しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、「ことば」の学習としての共通基盤をもつ国語科と英語科の文法教育を連携させるための具体的方策を提示することを目的とするものである。両者の連携によって学習の促進と混乱の軽減を図ることを研究全体の目標とする。

英語(外国語)を学ぶことのメリットとして、「英語(外国語)を学ぶことで日本語が見えてくる」などといわれるが、英語を通して

学習者が日本語についての理解を深めるには、英語の教員に日本語に関する知識がなければならない。本研究では、英語を学習するときに、日本語と関連させることで日本語の理解が深まり、英語学習と日本語学習(国語学習)の双方にとって有益と思われる知識を体系化する。英文法と国文法を相対化するには、一般言語学的な視点が不可欠であり、とりわけ認知言語学(cognitive linguistics)の知見は、表層的な言語現象を支える一般的な認知能力を基盤とする点で、言語教育への応用が最も期待されている。こうした背景から、本研究は、認知言語学の手法を援用し、認知能力の普遍性と多様性を認めつつ、日本語と英語の共通性と差異を言語教育の観点から研究するものである。

具体的に本研究が目指す姿として2つの事例を挙げておきたい。まず、日本語の受動文と英語の受動文は同じだろうか。例えば、「雨に降られた」のような日本語を英語で言おうとしてみよう。言えないのは、そもそも日本語には受動文に2種類(直接受身文と間接受身文)があって、間接受身文は英語に対応しないという事実を知る必要がある。この事実は日本語に対するメタ理解としても有益なものと思われる。もう1つは、英語の仮定法と日本古典文法の反実仮想は別物だろうか。学校教育では両者を相対化することさえ行われていないが、英語の仮定法で「現在の事実に反する事象を描くのに助動詞の過去が用いられる」と、日本古典文法の反実仮想で「現在の事実に反する事象を描くのに過去の助動詞が用いられる」ことは偶然ではなく、認知言語学の知見では一定の動機づけ(motivation)が与えられている。こうした理論的な背景を含めて、学術的な基盤をもつ解説を目指すものである。

3. 研究の方法

(1) 題材の収集と内容の検討

日本語と英語に関する対照言語学的研究は言語研究の中に長年の蓄積があるものの、学校教育に適應可能なものは多くない。まず、英語と日本語の複眼的な学習という観点から「学校での言語教育に有効な題材」として、次のような項目を取り上げる。

- ・品詞体系に関するもの
- ・品詞の対応関係に関するもの
- ・品詞の機能に関するもの
- ・文法用語に関するもの
- ・文法現象に関するもの
- ・音声・音韻に関するもの
- ・語用論的な側面に関するもの
- ・文化的な側面(ことわざ等)に関するもの

(2)解説の検討

興味深いと思われる題材を収集した上で、その題材が興味深いものであっても「解説」が機械的すぎれば面白さも消えてしまう。そうしたことがないように、解説にできるだけ視覚情報を多用し、知覚と言語の共通基盤を援用しながら認知的に理解容易な「イメージ図式」や「解説」を記述する。その上で、現職の学校教員との間で意見交換会を開催し、学校現場の先生方にとって活用しやすいものへとブラッシュアップを重ねていった。

4. 研究成果

本報告書では紙幅の都合上、2つの成果を取りあげ、その上で全体の成果を要約する。

(1) 事例研究(その1)

英語の不規則動詞は go-went-gone や say-said-said などのように形式的に不規則と言うだけでなく、頻度が高いという側面を持つ。一方、現代日本語で不規則動詞(変格活用)と言われているのは「する」と「来る」で、活用のパターンも不規則的で使用頻度も高いものの、国文法において不規則動詞は「する」と「来る」の2つしかないことにな

っている。

このような意味での不規則動詞に関して、発想を柔軟にし、日本語の動詞における「不規則」な部分を語尾の「活用形」ではなく、英語と同じように「語形全体」と考えると、尊敬語形や謙譲語形に専用の語形をもつ動詞を不規則動詞とみなすことができるようになる。日本語の敬語法において、動詞の敬語法は、尊敬語も謙譲語も多くの動詞は一定の規則によって生成される。すなわち、動詞の尊敬語は「お~になる/ご~になる」の形が基本であり、謙譲語は「お~する/ご~する」の形が基本であって、いわば規則動詞といえることができるのに対し、一部の動詞に不規則的な尊敬語や謙譲語が見られる。例えば、常体で「行く」や「言う」は、それぞれ尊敬語で「いらっしゃる」と「おっしゃる」であり、謙譲語では、それぞれ「参る」と「申し上げる」という形をとる点で、不規則動詞とみることができる。

同様に、常体で「する」という形の動詞は尊敬語で「なさる」であり、謙譲語で「致す」であって、語形全体の変化を見れば明らかに不規則動詞であるし、常体で「食べる」という形の動詞も、尊敬語で「召し上がる」であり、謙譲語で「いただく」であるから、やはり語形全体として不規則動詞といえることができる。ただ、尊敬語と謙譲語の両方で不規則になるもののほかに、尊敬語と謙譲語の一方のみで不規則になるものもある。例えば、常体で「着る」は尊敬語でのみ「お召しになる」という固有の語形を持つ一方、常体で「聞く」は尊敬語に固有の語形がなく、謙譲語でのみ「伺う」という語形をもつ。いずれも、不規則的な語形を持つことに加え、高頻度の動詞であって、英語の不規則動詞と共通の特徴をもっている。

このようなものを含めて日本語の不規則動詞とすると、英語の不規則動詞と日本語の敬語における不規則動詞とで意味的に対応

関係にあるものを整理すれば次のようになる。

日本語	英語
する	do
もらう	get
やる/くれる	give
言う	say
いる	be
行く	go
来る	come
食べる	eat
飲む	drink
着る	wear
見る	see
会う	meet
知る	know
聞く	hear
思う	think

この表に挙げた日本語動詞の尊敬語や謙讓語は、基本形(常体)から規則的に作られるのではなく、動詞ごとに固有の形が設定されている点で、表のような動詞こそ不規則動詞と呼ぶことが教育的に有効と思われる。このような不規則動詞 高頻度動詞という原則から、現代日本語の敬語法に英語との共通点を見いだすことによって、日本語と英語の複眼的な理解の促進が期待できる。

(2) 事例研究(その2)

高等学校では「国語」の中に「古典」があり、極論すれば高校生にとって古典は外国語に近いものを感じられているところもある。さて、古典語(=古代日本語)の特徴の一つに「歴史的仮名遣い」があり、その特徴の一つに二重母音の長母音化がある。例えば、「ア・イ・エの後ろにウが続くと特殊な長音になる」というもので、au ɔ:, iu yu,

eu yo のように変化する。このうち、については、歴史的仮名遣いで「まうす(mausu)」と書く動詞が「申す」になる例が挙げられる。この現象と相対化できるのは、現代英語において au という二重母音が ɔ: という長母音に変化する現象で、具体的には、auction(競売)や laundry(洗濯場)のほか、sauce(調味料のソース)や faucet(蛇口)などに見られる。このとき、古典語(古代日本語)に見られる au ɔ: という変化と現代英語に見られる au ɔ: という変化が基本的に同じものであって、ここに「古い日本語」と「現代の英語」という時空を超えた2つの言語に共通の現象を見いだすことが可能になる。さらに言えば、関西方言で「買う」や「会う」に完了の助動詞「た」がつくとき、終止形のまま「かうた(kauta)」や「あうた(auta)」となり、これが、それぞれ「こーた」と「おーた」となるところにも au ɔ: の変化が見られる。こうした現象に関するメタ知識も高等学校における「英語」と「古典」を有機的に連携させる具体的な側面になるとと思われる。

(3) 研究成果の趣旨

本研究では、基礎研究レベルの成果として、英語と国語で用語や概念規定が異なる現象を体系的に整理し、英語と国語を一元的に理解できるようにした記述が作成された。このことから、教育的な意味での成果として次の2つが挙げられる。

第1に、現在、英語科と国語科が完全に別の教科として設定されている中で、中学校ないし高等学校のレベルで合科的な「言語科」が構想されたときの教科内容の基盤となることが期待できる。

第2に、「日本語」の範囲を古典語(古代日本語)にまで広げることで、高校生にとって「古典」が、さながら外国語のように受け止められている中で、英語と現代日本語の関

係を対照言語学的に見るだけでなく、古典と英語にも有機的な関係を見いだす具体的学習内容が明らかになる。これにより、中学生・高校生にとって「英語と日本語」「現代日本語と古代日本語」、さらには「英語と古代日本語」までも相対化する、おそらくは初めての経験を提供することになるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

菅井三実 2014「文章作成指導へ言語学的アプローチ」『月刊兵庫教育』(兵庫県立教育研修所), 平成 26 年 3 月号, pp.28-31,

〔学会発表〕(計6件)

菅井三実「言語理論と教育実践との相互作用的アプローチ」日本英文学会関西支部第9回大会シンポジウム(立命館大学衣笠キャンパス, 2014 年 12 月 21 日)

辻 幸夫「コミュニケーションと心・言語: 認知科学の立場から」東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会(創立50周年記念大会特別講演 於 国立オリンピック記念青少年総合センター, 日時: 2012.10.24)における招待講演.

八木橋宏勇「聖書の引喩と文体的効果」日本文体論学会第101回大会, 2012 年 6 月 24 日, 日本大学法学部三崎町キャンパス

八木橋宏勇「ことわざの暗示引用」第24回ことわざフォーラムシンポジウム「ことわざと言語学」, 2012 年 11 月 10 日, 早稲田大学文学部戸山キャンパス

八木橋宏勇「ことわざの定型性と創造性」日本ことわざ学会(2014 年 3 月 23 日),

八木健太郎「中国人留学生の言語的实践につ

いての一考察 就職活動場面等における日本人学生との違いから」留学生教育学会第18回研究大会。(2013 年 8 月 24 日)

〔図書〕(計4件)

菅井三実 2015『国語教育への言語科学的アプローチ』くろしお出版.

菅井三実 2012『英語を通して学ぶ日本語のツボ』開拓社.

橋本功・八木橋宏勇 2012『聖書起源のイデオロム 42 章』([原著]David Crystal. Begat. Oxford University Press, 2010), 慶應義塾大学出版会

八木橋宏勇 2013『世界の英語と社会言語学 多様な英語でコミュニケーションする』慶應義塾大学出版会.(Yamuna Kachru and Larry E. Smith, *Cultures, Contexts, and World Englishes*. Routledge, 2008.)の共訳),

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅井三実 (SUGAI KAZUMI)

兵庫教育大学学校教育研究科・准教授

研究者番号: 10252206

(2) 研究分担者

辻 幸夫 (TSUJI YUKIO)

慶應義塾大学法学部・教授

研究者番号: 10207368

八木健太郎 (YAGI KENTARO)

中央学院大学商学部・講師

研究者番号: 80440527

八木橋宏勇 (YAGIHASHI HIROTOSHI)

杏林大学外国語学部・准教授

研究者番号: 40453526